

す粗鬆・浮腫状となり血管の増加・拡大も著明となる。腺は延長し擴大著しくかつ不規則となり、著明な皺襞および乳嘴状突起を形成する。腺上皮細胞は肥大・延長著明で遊離面より圓形・橢圓形の突起を生ずる。原形質の核上部は空胞充滿せるため明調となる。この際核は基底に近く位置する。ついで核は基底より離れ中間位に達し橢圓形・長橢圓形となる。(c)黄体期後期においては間質は月經の近づくに従つて漸次緻密化し血管も收縮・減少してくる。腺上皮は月經前2, 3日より月經初期迄は低い圓柱状を呈するに至る。核は次第に圓形・卵圓形となり基底に近く配列する。②特殊所見 腺上皮細胞の絲粒體は絲状・短桿状を呈する。まずこの絲粒體より小顆粒が形成される。この顆粒は次第に増大して大きい分泌顆粒となり、ついで大顆粒は全體が等調性に染色性を失つて分泌空胞となる。分泌空胞は、細胞の腺腔側に移行し、さらに増加すれば腺腔面に圓形・橢圓形の突起を形成する。すなわちアポクリン腺様式によつて内容は腺腔に排出されるわけである。この分泌現象は卵卵期前期では低調であるが中間期特に排卵期前後においては旺盛である。ゴルヂ装置は分泌顆粒・分泌空胞を持たない細胞では核上部に黒染する索條として認められ、その網工は簡單であるが、分泌顆粒・分泌空胞が出現すると、網工は複雑となり、旺盛な發育を呈する。この状態は前記腺細胞の形態及び分泌現象の強弱と全く一致する。

4. 結論：以上の如く子宮腔部糜爛腺上皮細胞に分泌機能が存在し、しかもこれが周期性變化をいとむことを認め、とくに排卵期前後に旺盛なることを形態學的に證明した。

78. 女子の運動が基礎體温曲線に及ぼす影響について

(廣島大教育學部福山分校) 松永 勝

齋藤によればスポーツとは元來スポーツ(興味)を追及して行われる運動の意味であつたが、現代では競技運動へと進んできたものであり、體育(physical education)は身體運動を通じて人間を完成する教育で、スポーツとは自ら本質的に異つたものであるとされている。

私はスポーツにしろ、體育運動にしろ、女子の運動が卵巢機能に如何なる影響を及ぼすかを調べるため基礎體温(B.B.T.)を計測してみた。対象は廣島大學教育學部體育科學生22名で計測周期は2~10周期である。

體温計は攝氏體温計を用い體温表は運動の種類及びその量・日常の生活・起床・就寝時刻・身體症狀・月經の状態などを毎日くわしく記入せしむる様な特別なものを

作製した。體温測定上の注意は周知の如くである。

計測した結果を下に述べよう。

曲線の種類：22名中17名が2相性曲線を、4名が單相性曲線を、1名が不定性曲線を示している。

つぎに各種の平均値をあげるならば

	\bar{x}	u^2
下降期 日數	1.582日	2.396
低溫期 日數	15.624	33.870
上昇期 日數	3.736	7.751
高溫期 日數	12.182	48.040
下降期體温	36.787°C	8.443
低溫期體温	36.303	4.847
陥落期體温(陥落差)	2.3'	2.175
上昇期體温	36.514°C	30.030
高溫期體温	36.873	5.842
單相性曲線體温	36.359	12.460
陥落期	次月月經前 15.251日	13.725

対象學生のうち本學入學前スポーツの経験あるもの14名、ないもの8名であるが、入學後は正課として1日4~6時間の實技があるほか、學生によつては選手としての練習及び試合があるのである。

かかる運動量がB.B.T.に影響を及ぼしたと思われる症例は選手2例が存在し松本・大倉の分類に従えば共にI乃至II型がV乃至VI型に變じたものであるが、スポーツ練習量を減らすことにより舊に復している。單相性曲線をえたもののうち2名、及び不定型曲線をえた1名は、初潮前より陸上競技の選手として活躍したものであるが、單相性曲線をえた他の2名はスポーツの経験は持っていない。前3者は長期の激しいスポーツがストレスとなつたかも知れないが、後2者は運動の負荷が2カ月でありその後この負荷を全く除いても單相性曲線を維持する點よりすれば原因は他に存在するのではあるまいか。しかして2相性曲線をえている者の大部分はIまたはII型を示していることからして激しい運動はB.B.T.曲線に少數ではあるが影響を及ぼすが、體育運動はB.B.T.曲線に大なる變化は與えないといふと思つている。

79. 所謂出血性メトロパチーの本態に関する研究

(京大) *大橋敏郎, 近藤一郎, 東條伸平,
眞鍋英夫

いわゆる出血性メトロパチーの概念及びその本態につ